MEMOIRS
OF
AN INVISIBLE MAN

# 透明人間の告白

H・F・セイント 下 高見 浩 訳

Title : MEMOIRS OF AN INVISIB
Author : H. F. Saint
Copyright © 1987 by H. F. Saint
Japanese language paperback rights
with Georges Borchardt, Inc., New
through Japan UNI Agency, Inc., T

# 透明人間の告白（下）

新潮文庫

*Published 1992 in Japan*
*by Shinchosha Company*

平成四年五月二十五日　発行
平成四年六月二十五日　二刷

訳者　高見浩

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（〇三）三二六六―五一一一
編集部（〇三）三二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Hiroshi Takami 1988　Printed in Japan

ISBN4-10-237702-6 C0197

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮文庫

# 透明人間の白

下巻

H・F・セイント
高見　浩訳

新潮社版

4905

# 透明人間の告白

下卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

**主要登場人物**

**ニック・ハロウェイ**……ウォール街の証券アナリスト
**アン・エプスタイン**……『ニューヨーク・タイムズ』の記者
**ロバート・キャリロン**……〝公正な世界のための学生連合〟代表
**バーナード・ワックス博士**……〈マイクロ・マグネティックス社〉社長
**デイヴィッド・ジェンキンズ**……秘密情報機関大佐。透明人間捕獲の責任者
**タイラー**
**モリッシー**
**クリラン**
**ゴメス**
……ジェンキンズの部下
**キャシー**……ニックの秘書
**アリス**……透明人間の恋人

# 11

次の数週間、僕は〈アカデミー・クラブ〉で快適な日々をすごした。毎晩、ヴォリュームたっぷりの食事をつくると、五階まで運んでサン・ランプの下で食べる。それから、顔を洗ってひげを剃る――一日で一番面倒な仕事だ――主化粧室の隣りには大きな洗面室があって、洗面器や棚が並んでいる。棚の上には剃刀、ハサミ、櫛、ブラシ、それにありとあらゆる石鹸やローションが並んでいるのだが、電気剃刀だけはない。シェーヴィング用の石鹸は顔にあまりよくつかないのだけれど――ひげを柔らかくするというより、顔の位置をはっきりさせるために――たくさんつける。そして、鏡をじっと見ながら、さっさっと空中から石鹸の泡を消してゆくのだ。シャワーの音は建物中に響くし――ほかの音も聞こえなくなるので――体は洗面台の前に立ってふく。

次の日課はプールでの水泳だ。暗闇のなかで、何度かクロールで往復する。おかげでかなり泳ぎが上達した。子供の頃は、水泳は嫌いだったのだが。ここでの暮らしは孤独で退屈ではあるけれど、快適で、楽しい一面もある。

一週間に一度は散髪し、切った髪をトイレに流した。洋服は、二、三日ごとに洗濯した。

ゲスト・ルームの予約状況には常に注意して、空き部屋があるとリネン・クローゼットから洗いたての寝具をもっていき、夜になるのを待って鍵をかけて閉じこもるのだ。空き部屋がないときは――ウィークデイはたいていそうだったが――ソファの上に横たわるか、洗いたてのタオルの上で寝た。

日中は、図書室で読書にいそしむ。まだだれもいない早朝に読みたい本を選んで、好みのデスクに置いておくのである。僕は物理学の研究に手を染めはじめていた――正確には粒子物理学だが――僕の見たところ、この学問、科学よりも神学との共通点のほうが多いようだ。僕のように、それが日常生活に密接な関係をもっている者でなければ、あまり意味のある学問とは思えない。〈アカデミー・クラブ〉の図書室は科学関係には弱いほうだが、僕のような初心者には十分だった。僕は何時間も百科事典や科学雑誌を見てすごした。退屈すると、ぼんやりと新聞を読む。新聞は、僕にとってしだいに意味のない存在になりつつあった。新聞にも飽きると、屋上にのぼって、日なたぼっこをする。

最初は毎日、クラブが込んでくるお昼頃に外出することにした。自分のアパートに閉じこもっていた当時は、頭がすこし変になりかけていたと思う。それが判断力をも狂わせて、脱出の時期を遅らせたのだ。こんどは、一日に一度は新鮮な空気を吸って、運動をすることにしようと決めた。新鮮な空気を吸えば、頭もすきっとするだろう。客観的な判断力というやつを失わないようにしなければ。

僕はたいていマディスン街まで歩いた。それだけでけっこう疲れるのだが、さらに、比較

的安全なセントラル・パークまで足をのばす。そこは広いし、人もあまりいないので――すくなくとも街路と比べれば――動きまわりやすいのだ。それで安心して長時間歩きまわり、夕方になるまでクラブにもどらないこともあった。

ある曇った午後のこと、その日も散歩にでかけていた僕は、七十九丁目の横断路の北の野原にあるベンチに腰かけていた。そのベンチは、座面の板が一枚欠けている。それで安全だろうと思ったのだが、そのうち数人の学童たちがやってきたのを見て、とっさに立ちあがり、草原のほうに逃げた。何人かの集団、とりわけ子供たちの集団は必らず避けることにしている。と、案のじょう、彼らの一人が僕のすわっていたベンチに飛びあがって歩きはじめた。人数は六人。ほとんどが黒人で、十四歳以上の者はいないようだった。なにやら笑い合ったり、冷やかし合ったりしながら、ぶらぶらと歩いていく。ときどき、喧嘩の真似をして、わざと小突き合ったりもしている。

「もっとていねいな口をきけよ、おれはおまえのおやじなんだぞ」

そのとき僕は、あまり彼らには注意を払っていなかった。すこし前から空が曇ってきていたので、クラブから数キロも離れたところで雨に濡れるのはいやだなあ、などと考えていたのである。そもそもこんな日に散歩にでてきたのが馬鹿だった。どういう道順で帰るのがいいだろうと考えていると、突然、バケツをひっくり返したような雨が降ってきた。とたんに、体はぐしょ濡れ。それが気になって、背後で叫んでいる子供たちの声はぼんやりとしか耳に入っていなかった。

「なんだよ、おまえ、びしょ濡れだぞ！」
「おまえだってそうじゃないか、ばか！」
子供たちの二人は木の下に逃げこんだが、体はすでに濡れていた。残りの子供たちは、僕同様、雨に濡れながら突っ立っている。
「おい！　なんだ、あれ！　変なかっこうで水が跳ねてるぞ！」
何事だろうと思って、僕は振り返った。
「見ろよ！　動いたぜ」
すこしたって、ようやく、連中が話しているのは僕のことなのだという恐ろしい事実に気づいた。僕の体にぶつかって表面を流れている雨は、空中にはっきりと人間のフォルムを浮かび上がらせていたのだ。
「見ろよ！　なんだ、あれ？」
「なんかの動物じゃないか」
「人間みたいだぜ。変なの！」
子供たちと僕は、微動もせず、口もきかずに、じっと睨(にら)み合っていた。とにかく、逃げよう。僕は振り返り、どこか隠れる場所を捜して草原を横切りだした。
「おい、また動きだしたぞ！」
二十メートルほど進んだとき、突然、背中に鋭い痛みを感じた。てっきり背後にだれかが迫ったのかと思って、おそるおそる振り返った。が、子供たちは二十メートルほど離れてつ

いてくる。僕が振り返ったとたん、彼らはおずおずと後ずさった。
「見たか？　当ったぞ！　命中だ！」
彼らの一人が、腕をあげた。連中は、僕に石を投げつけていたのである！
「あっ、止まった！」
子供たちはみな、身じろぎもせずにこっちを見ている。
「なんだろうな、ボビー？」
「動物みたいだな」
「ちがうよ、見てみろ！　腕があるぜ！　人間だよ！」
「ばか、水が跳ねてるだけさ。格好が動物に似てるんだよ」
一人の子供が、そっと近よってなにかを投げた。
「また当った！　石が跳ね返ったもん」
石をもっている子供は何人もいるらしい。こっちが一歩後ずさると、彼らはじりっと前進する。
「また動いたぞ！　こいよ！」
恐怖が吐き気のようにこみあげてくるのを覚えつつ、僕は振り返って逃げだした。こちらが動くと同時に、子供たちは追いかけてきた。
「逃げだしたぞ！」
「つかまえろ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なにか鋭いものが、うなじに当った。痛かった。落着け、と自分に言いきかせた。なにかいい方法を考えよう。逃げても無駄だ。子供たちはかえって面白がってついてくる。それに、どこに逃げればいい？　両手をあげて身を守りながら、僕は振り返った。

「とまった！」

「気をつけろ！」

子供たちは歩調をゆるめたものの、相変わらずじりじりと迫ってくる。彼らの一人は、枯れ枝を見つけたらしい。そいつを僕に振りおろそうと、頭にかざしていた。こちらを包囲するように彼らは散開しはじめている。なにかいい方法はないものかと、必死に頭を絞った。ただ後退したのでは、かえって彼らをおびき寄せるだけだ。おもいきって、一歩、彼らに詰め寄ってみた。子供たちは、一歩後ずさる。だれも口をきかない。彼らはさらに一歩後ずさり、一人の子供が当てずっぽうで石を投げた。枯れ枝をもった子供が、そいつを頭上にかざした。僕は、両手を振りまわしながら突進した。二人の子供は逃げだしたが、枯れ枝をもった子供は、かえって向かってくる。枯れ枝を僕の左肩に振りおろして後ずさった。僕は思わず、呻き声をあげた。

「やったぞ！」

「声をあげたぞ！　聞いたか？　声をだしたぞ！」

痛みに耐えかねて、僕はよろよろと後ずさった。

「やったぜ！」

枯れ枝をもった子供が、またしても向かってくる。僕は無事なほうの手で身を守りながら、一歩後ずさった。枯れ枝は、脇腹に当った。ショックで僕はよろめき、足をすべらせて地面に倒れた。

「倒れたぞ！　転んだみたいだ！」

「つかまえろ！」

彼らは、わっと押し寄せてきた。石が体中に降ってくる。またしても枯れ枝が振りかざされた。その瞬間、僕はぐるっと転がって四つん這いになり、必死に起きあがろうとした。枯れ枝は、右足を襲った。なんとか立ちあがれた。そのまま、けんめいに駆けだした。

「あそこだ！　逃げてくぞ！」

子供たちは一団となって、叫びながら追いかけてくる。

「足跡を見ろ！　つかまえろ！」

その子の言ったとおりだった。走るにつれて、濡れた泥の上にくっきりと足跡が残っていくのだ。まずい。向きを変えて、舗装された歩道を走りだした。前方にいた四人連れが騒ぎに気づいて、何事かと立ちどまった。そのうちの一人は女性で、赤いレインコートを着て、赤い帽子をかぶっている。大きな柄模様のコーモリ傘をさしている者もいた。黄色いレインコートをまとっている女性もいる。

子供たちの一人が叫んだ。「つかまえてよ、そいつ！　ぼくの自転車を盗んだんだ！」

前方の連中は、怪訝そうな顔でこちらを見ている。

「そいつをとめて！　転がしちゃって！」

僕は向きを変え、南に向かって駆けだした。気がついたときには七十九丁目への横断路の端に立って、四メートル下を交差している別の道を見下ろしていた。背後からは子供たちが迫ってくる。僕は、半ば崖をすべるようにして、下の歩道に飛びおりた。着地したはずみで足がもつれ、前につんのめった。

「下に飛びおりたぞ！」

「歩道にいる！　つかまえろ」

一人の子供が、早くも崖をおりはじめた。彼がすこし離れた歩道に着地した瞬間、僕はよろめきながら立ちあがって、反対の方角、公園の中央部に向かって必死に駆けだした。さらに一人の子供が崖をおり、あとの連中は上の道路の端を走っている。この道は前方でパーク・ドライブの下を潜ることになる。地下道になるのだ。

「地下道に入っていくぞ！　地下道だ！　つかまえろ！」

地下道にとびこんだ僕は、まるでガラスの表面を滑り落ちるように体の表面を滑り落ちる水滴を見守った。それも、いまでは二、三滴しか残っていない。さながら犬のように、体を揺すって、それを振り払う。二人の少年が地下道に入ってきて、周囲を見まわしている。もう一人の少年は地下道の向こう側の崖を降りたらしく、反対側から木の枝を手に近づいてくる。透明な体をとりもどしはしたものの、僕は挟み撃ちにあってしまったのである。「おい、見えたか？」

「こっちからは出てきてないぞ」
「まだこの地下道にいるよ。感じでわかるんだ」
下水溝は例によって詰まっており、地下道の表面には大きな水溜まりができている。そこを歩いたら、水をはねる音でこちらの位置がわかってしまうだろう。しかたなく、震えながら歩道の真ん中に立ちつづけていた。
枯れ枝をもった少年が、地下道の天井を見まわしている。
「その端に立って、なにか出てくるか見守ってろよ」
僕は、身をすくめて立っていた。枯れ枝をもった少年は、水を蹴りながら近づいてくる。
「気味が悪いな」
「消えちまったよ」一人の子が言った。「小っちゃい竜巻みたいだな。どっかにいっちゃった」
「だって、この枝でぶったんだぜ。あれは生き物さ」その少年は道路の向こう側までいって、崖を眺めている。
「下水溝に流れちゃったのかもしれないぜ」別の少年が言う。
「この下水溝じゃ、なにも流れないよ。水だって流れてないんだから」僕をぶった少年が言った。
「ここには、もういないんじゃないのかな」と別の少年。
僕はじっと立っていた。

「気味わりいな、まったく」枯れ枝をもった少年が言った。「ひょっとすると、あいつ、水ん中に住んでんじゃねえかな」じっと水溜まりに目を注ぐと、彼は枯れ枝で、水面を激しく叩きはじめた。

「また出てくるかもしんねえから、よく見てろよ」水面と地下道の壁を、彼はめちゃくちゃに叩きはじめた。こっちは歩道に立っているので、よける余地がない。いずれはぶたれてしまうだろう。さもなければ、また雨の中に追いやられてしまうかもしれない。

そのとき、一台のメルセデスが、ワイパーをフルに動かしながら雨の中から現われ、スピードを落して地下道の水溜まりの中に進入してきた。枯れ枝をもった少年が歩道にあがって、やりすごす。僕は、彼のすぐ隣りまでにじりよった。そして車が目前にさしかかった瞬間、左足をバンパーにかけると同時にリア・デッキに身を投げ、ウィンドウのふちにしっかりしがみついた。車は僕の重量でぐっと沈む。全体重がデッキに乗った刹那、どすんという鈍い音がした。何事だろうと振りかえるドライヴァー。彼の目には、メルセデスに向かって狂ったように枯れ枝を振りまわしている少年の姿が見えたことだろう。

「車だ！　車に飛びのったぞ！」

もう一人の少年が、車に向かって、手を振りながら近よってきた。

「止まれ！　止まれ！　止まれったら！」

ドライヴァーは猛然と加速した。メルセデスは、後部ウィンドウにしがみついた僕をのせたまま少年たちを置き去りにして走り去った。

セントラル・パーク・ウェストの交差点でメルセデスが止まったとき、僕はリア・デッキから飛びおりて、よろめきながら地下鉄の駅に降りていった。首と頬から血が流れているらしい。さんざんぶたれたせいだろう、体のあちこちがひりひり痛む。子供たちに半殺しにされたネズミのような気分で、ホームの端のベンチに腰かけると、僕はなんとか落着きをとりもどそうとつとめた。しばらくして電車に乗り、六番街の五十二丁目駅でおりた。階段の下で、みじめに震えながら突っ立っていること三十分。やがて雨がやんだので、足を引きずりながらどうにか〈アカデミー・クラブ〉まで帰ってくることができた。時刻は五時をまわっている。クラブがいちばん込んでいるときだ。ゲスト・ルームには入れない。五階までのぼって、物置に忍びこむ。洗いたてのタオルの束の上に腰かけ、体を撫でまわして怪我の程度をしらべた。骨折した箇所はないようだが、肩と肋骨はわからない。首の出血がつづいているのかどうかもわからない。とにかく、タオルをていねいに巻いておく。それから身を丸めると、とたんに寝入ってしまった。

目がさめると、朝になっていた。ということは、夕食を抜かして寝つづけたことになる。これで二日間食事抜き。体中がひりひり痛み、呼吸するのも容易ではない。立ちあがろうとすると、右膝がかなり腫れているのに気づいた。その夜はどうにかキチンまでたどり着くことができた。体の痛みはそれから数週間もつづいた。肋骨などは数カ月も疼きつづけたのだった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com